



Title	中国三江平原における国有農場の米加工販売と民営米業の展開：建三江分局の事例
Author(s)	朴, 紅
Citation	フロンティア農業経済研究, 18(2), 18-26
Issue Date	2015-10-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66071
Type	journal article
File Information	18-2-4_hong.pdf



中国三江平原における国有農場の米加工販売と民営米業の展開 －建三江分局の事例－

北海道大学大学院農学研究院 朴

紅*

Development of Rice Production and Marketing at State Farm and Private Rice Enterprises in the Sanjiang Plain of China: A case study of JianSanjiang Administrative Bureau

Hong Park*

Graduate School of Agriculture, Hokkaido University

Summary

Heilongjiang Province is the largest production area of Japonica rice in China, and is led by the state farm system (agricultural reclamation). The processing and sales part of rice production is operated by Beidahuang Group Co. Ltd., one of the three biggest companies of its kind in China. However, looking at rice sales of individual state farms, Beidahuang Group's sales have decreased amidst the changes in current farming enterprises and the growth of new private companies seen since the reformation of state-owned enterprises at the end of the 1990s. The JianSanjiang Administrative Bureau was chosen for the case study because it oversees the most newly developed rice production area, with a rapidly expanding production scale, and it accounts for 50% of the state farm system. The purpose of the case study is to analyze the differences between the business models of Beidahuang Group and private companies. The analysis reveals that Beidahuang Group concentrates on selling unhulled rice, whereas private companies have higher sales in polished rice.

I はじめに

黒竜江省の稲作は、1985年の39万haから2010年の277万haへ、総収量も同じく粳163万トンから1,843万トンへと急速に拡大を見せている。この2010年の数字を東アジアのジャポニカ米産地と横並びで見ると、日本は163万ha、粳1,194万トン、韓国は89万ha、粳579万トン、台湾は24万ha、粳145万トンであり、黒竜江省の数字はこの3国（地域）の合計にほぼ匹敵している^{註1)}。まさに、北方に出現した巨大ジャポニカ米産地といえることができる。

その中核を担ってきたのが国有農場群であり^{註2)}、米の加工販売のグループ企業としての北大荒米業

であった（朴ほか〔8〕）。この企業は、グループ参加農場の産地化を図るとともに、粳保管・精米加工を行い、輸出を含む販売を行う国内第3位の巨大流通資本に成長している。しかし、国有農場の米総生産量から見ると、その加工販売の割合はいまだ小さく、むしろ民営米業（精米加工企业）の役割が大きいことが明らかになってきている（朴ほか〔12〕）。

そこで、本論では稲作生産が急拡大し、その生産量が国有農場の50%を占める建三江分局を対象として、農場レベルにおける北大荒米業の位置と民営米業の展開の実態を解明することを課題とする。行論では、全国における精米流通と加工企

*Corresponding author : park@agecon.agr.hokudai.ac.jp

業の動向を再整理し^{注3)}、北大荒米業における建三江分局^{注4)}の位置づけを行った上で、建三江分局の稲作生産の展開に対応した北大荒米業の加工事業とそれに対抗する民営米業の展開を位置づける。

II 精米加工企業の動向

中国における2010年の籾生産量は19,576万トンであり、2006年と比較しても1,400万トン（増加率7.7%）増加している。商品化率は2006年が41.8%、2008年が47.0%であり、以降の数字は公表されていないが、趨勢から予想して50%とすると、およそ9,800万トンが流通量になる^{注5)}。また、精米率を67%に見積もると、精米ベースでの流通量は6,500万トン強となる。表1は精米加工量を示しているが、ここ3年間、2008年の4,800万トンから2010年の7,300万トンへと急速に増加を見せており、逆算すると商品化率は55%となっている。内陸部での自給経済が急速に崩壊していることが予想される。同表は、2010年において加工精米量が200万トン

を上回る稲作産地の省を示したものである。東北3省はともにランク入りしており、その合計は1,274万トンで全体の17.4%を占め、黒竜江省のみでも826万トン、11.3%を占めている。ただし、生産の伸びに対し、加工精米量はやや停滞的である。

表2は、全国の精米加工企業の動向を示したものである。数字を把握できる2003年からの企業数をみると、2003年からいったん減少を見せた後、2009年と2010年ともに増加傾向にあり、8,500社となっている。また、加工能力についても、2006年の14,778万トンから2010年の24,339万トンへと急速に拡大している。これは近年の加工精米量の急速な増加に対応している。工場規模別では、日処理量籾100トン未満の企業が圧倒的であったが、この層の淘汰と他の層の規模拡大が進み、総加工能力からいっても100～200トン層（年間3～6万トン処理）が主流になりつつあり、それ以上の処理能力を持つ工場も急速に増加を見せている。

企業形態別では、北大荒米業のような国有・国有持株会社は2010年で799社、9.4%、処理能力

表1 省別の籾加工能力と精米加工量の動向

地域	籾加工能力(A)		加工精米量(B)			B/A	
	2009	2010	2008	2009	2010	2009	2010
湖北	23,681	29,962	6,739	7,723	10,624	32.6	35.5
安徽	18,686	24,483	5,819	6,972	9,611	37.3	39.3
江西	23,523	30,166	5,889	6,379	9,408	27.1	31.2
黒竜江	41,224	45,281	5,986	8,703	8,262	21.1	18.2
湖南	9,996	22,943	3,186	3,714	6,789	37.2	29.6
江蘇	13,609	17,283	4,746	5,321	6,453	39.1	37.3
四川	6,375	9,352	2,216	2,014	2,771	31.6	29.6
吉林	10,614	10,026	1,443	3,261	2,435	30.7	24.3
福建	5,782	6,251	2,081	1,961	2,194	33.9	35.1
広東	4,994	5,260	1,559	1,908	2,147	38.2	40.8
遼寧	9,932	9,816	1,938	2,058	2,038	20.7	20.8
河南	3,210	5,244	1,010	1,194	2,015	37.2	38.4
全 国	194,237	243,393	47,830	57,238	72,948	29.5	30.0

注) 中国糧食局『中国糧食年鑑』（各年次）により作成。

表2 中国における精米加工企業の変化

単位:社、万トン

		合計	国有等 企業	外資系 企業	民営企 業	～100 トン/日	100～ 200	200～ 400	400～ 1,000	1,000 ～
企業 数	2003	7,815				7,099	607	89	20	
	2004	5,666				4,741	754	123	38	10
	2005	7,260				5,949	1,025	209	65	12
	2006	7,548	848	24	6,676	6,143	1,059	251	77	18
	2008	7,311	900	25	6,386	5,296	1,498	405	88	24
	2009	7,687	754	36	6,897	5,023	1,941	570	115	38
	2010	8,519	799	41	7,679	4,785	2,605	910	172	47
加工 能力	2006	14,778								
	2008	16,047	2,248	167	13,632	6,471	4,610	2,587	1,213	1,166
	2009	19,423	2,292	215	16,828	6,457	5,981	3,541	1,580	1,862
	2010	24,339	2,889	340	21,110	6,158	8,096	5,616	2,337	2,128

注1) 中国糧食局『中国糧食年鑑』、呉[2007]により作成。

2) 外資系企業には香港、マカオ、台湾系を含む。

は2,900万トン、11.9%となっている。食糧安全保障上、国有部門を残存させる政策的意図があり、他の国有企業とは異なっている。外資系企業は数が限られているが、一定の割合を維持している。圧倒的に多いのは民営企業である。企業数は2010年で7,679社、90.1%を占め、処理能力でも21,110万トン、86.7%を占めている。

表出はしていないが、2010年の企業形態別の規模をみると、日量100トン以上の処理能力を持つ企業の割合は平均で43.8%、国有企業等が52.2%、外資系企業が75.6%、民営企業が42.8%である。さらに、日量200トン以上の企業割合は、それぞれ13.3%、16.8%、41.5%、12.5%となっている。また、加工能力別工場のシェアでは、100トン以上の工場シェアはそれぞれ74.7%、83.4%、95.0%、73.2%である。同じく200トン以上工場のシェアは、それぞれ41.4%、53.7%、80.6%、39.1%となっている。外資企業でははっきりとした規模の優位性があるが、国有企業等の民営企業に対する優位性は明確なものではない。

表1に戻り、工場の粳加工能力と実際に加工された精米量を比較すると、2009年では処理能力19,400万トンに対し、加工精米量は5,700万トン、29.5%であり、2010年においてもそれぞれ

24,300万トン、7,300万トンで、その比率は30.0%である。精米率は67%程度であるから、稼働率は50%以下にとどまっていることがわかる。特に、対象とする黒竜江省では2009年と2010年の両者の比率は21.1%、18.2%と他省と比較してきわめて低くなっている。これは、近年「稻高米低」（粳価格が高く、精米価格が比較的低い）現象が現れており、精米せずに原糧（粳）で販売する割合が増加していることによる。このことは、2010年の加工精米量が826万トンと前年度の870万トンを下回っている点にも現れている。

Ⅲ 北大荒米業の原糧調達と加工部門

黒龍江省における国有農場の米の集荷・加工・販売企業となっているのは北大荒農業グループ傘下の北大荒米業である。北大荒米業は三江平原にある4つの分局並びに16の優良農場（基礎農場、北大荒農業グループの指定農場）の精米場を統合して2001年に設立したものである。その原糧調達先は、16の農場を基本としていたが、近年では、後述のように基礎農場を離れて、独自に原糧調達するケースが増えている。その米に関わる営業部門は、生産技術部、国際貿易部、

国内貿易部、原糧貿易部の4部門からなっている。

朴〔8〕で示した2009年の北大荒米業における米の流通フローを再確認すると以下の通りである。生産技術部が所管する生産農場から粳123万トンが集荷され、うち40万トンが21の貯蔵施設で保管され、原糧貿易部を通して粳のまま糧食購買販売企業に売却されている。残りの粳83万トンは11の精米所で加工され、精米56万トンのうち44万トンが国内販売され、10万トンが輸出されている(2009年)。

このなかで、始点となる原糧調達先を示したのが表3である。これは、粳の買い上げを行った24農場(一般農村も含む、以下同)の粳買上量とそのうちの精米用原糧、生産された精米量を整理したものである。粳買上量は2010年が107万トン、2011年が75万トンである。2008年には80万トン、2009年には123万トンであったから⁵⁾、ここ4年間の粳買上量は75万トンから123万トンの間にあり、その振れは非常に大きいと言える。

集荷範囲は北大荒米業の拠点である三江平原の4つの分局で80%程度を占めているが、そのうち基礎農場が10農場、一般の国有農場(16農場以外の農場)が8農場であり、分公司が中心とはいえない。また、黒龍江省東部の綏化分局の2農場と一般農村の4地区からの集荷も2割前後を占

めている。表4により基礎農場の位置づけを確認しておこう。これは、16の基礎農場の稲作面積と収穫量および集荷量を示したものである⁷⁾。全体の収穫量464万トンに対し、集荷量は57万トンであり、集荷率は12.3%にとどまっている。また、集荷を行っている農場は10にとどまっており、10万トン以上集荷しているのは、友誼農場(16万トン)と七星農場(13万トン)のみであり、5～10万トンが2農場、2～5万トンが3農場、1万トン未満が2農場となっている。

北大荒米業の粳買上量のうち、2010年では39.8%の43万トンが精米原糧となり、精米出荷量は28万トンである。2011年では54.4%の41万トンが精米原糧となり、精米出荷量は28万トンとなっている。この2年においては精米販売は30万トン弱となっており、2009年の56万トンと比較すると大きく減少している⁷⁾。これらは国際・国内貿易部を通じて販売されている。米加工率は農場によって大きく異なっており、図示していないが、全く精米を行っていない農場が3農場、米加工率20%未満が7農場、20～50%が6農場、50%以上が9農場となっており、農場毎の格差が大きいことがわかる。これに対し、粳販売は2010年が65万トン、2011年が34万トンであり、原糧貿易部を通じて販売されている。

このように、北大荒米業は、北大荒農業グループの中心的な存在であるが、必ずしもグループ構

表3 北大荒米業の原糧調達先

管理局		分公司 農場		粳買上量(A)		精米用原糧(B)		精米加工率(B/A)		精米量	
				2010 2011		2010 2011		2010 2011		2010 2011	
三江平原	宝泉嶺	2	1	25	55	21	5	83.5	9.5	15	4
	建三江	3	4	350	244	109	87	31.3	35.5	74	60
	紅興隆	3	1	257	160	132	172	51.5	107.1	86	118
	牡丹江	2	2	209	195	107	107	51.4	54.8	71	74
	小計	10	8	841	654	370	370	44.0	56.6	246	256
圏外	綏化		2	120	30	25	21	20.4	69.3	14	13
	一般農村		4	112	61	32	15	28.7	24.2	22	9
合 計		10	14	1,074	745	427	406	39.8	54.4	282	278

注1) 北大荒米業資料による。

2) 精米加工率が100%を超える農場もあるが、そのまま表示している。

表4 北大荒農業の基礎農場の集荷状況
(2010年)

単位: ha、千トン

管理局	農場名	水田 面積	粳収 穫量	米業集 荷量
宝泉嶺	1 二九〇	30,667	296	0
	2 江浜	13,733	116	3
	3 宝泉嶺	3,600	30	0
	4 新華	11,668	99	3
建三江	5 八五九	53,333	498	23
	6 七星	55,667	551	129
	7 勤得利	46,667	385	0
	8 青龍山	25,972	248	88
紅興隆	9 友誼	45,343	408	164
	10 二九一	20,142	192	46
	11 八五二	10,007	93	0
	12 八五三	28,000	282	23
牡丹江	13 八五四	43,667	399	43
	14 八五六	57,000	515	50
	15 慶豊	26,678	210	0
	16 興凱湖	35,127	313	0
合 計		507,271	4,635	572

注) 北大荒米業資料、『黒竜江墾区統計年鑑』 2011より作成。

成員の基礎農場(16農場)を主要な原糧調達先として位置付けておらず、独自に国有農場の囲い込みを行うとともに、非国有農場地帯の良質米産地にも提携先を伸ばし、原糧調達元を確保しているのである。

対象とする建三江分局について事前に確認しておく、2010年の分局全体の水田面積は57.6万ha(農墾全体の44.9%)、粳生産量は538万トン(同49.1%)、精米生産量は92万トン(同25.6%)である。北大荒米業による粳の買上量は35万トン(全体の32.6%)、うち基礎農場が24万トン(22.3%)であり、建三江分局は最も大きなウェイトを持っている。また、精米加工率は31.3%であり、管内のその26.3%と比較すると高い水準となっている。

Ⅳ 建三江分局の稲作生産と北大荒米業の加工事業

建三江分局は、三江平原の中でも最もロシア国境沿いにある地域であり、国有農場が主力となつて水田開発を行ってきた新開地域に属している(朴ほか[7])。このため、2000年初頭の停滞・後退期を経て2005年から水田開発がさらに拡大をみせ、水田面積は58万haとなり、国有農場のその45%を占めるに至っている(表5)。これに対応して粳生産量も増加し、2005年の206万トンから2010年には538万トンとなり、国有農場全体の49%を占める中核地帯となっている。しかし、後発地帯であることから精米加工施設の整備は遅れ、精米生産量は年間30万トン程度のレベルであり、多くは原糧として販売されてきた。しかし、2009年には58万トン、2010年には92万トンと加工実績を伸ばしている。

表5 建三江分局の粳生産と精米加工の動向

単位: 千ha、千トン

年次	水稻面積		粳生産量		精米生産量	
	建三江	割合	建三江	割合	建三江	割合
1993	26	24.8	145	28.5	18	85.7
1994	29	23.0	179	25.0	5	10.2
1995	46	25.8	331	26.7	28	31.1
1996	96	28.1	752	30.7	51	24.2
1997	146	27.5	1,179	29.1	92	27.1
1998	185	28.1	1,379	29.0	102	36.3
1999	204	29.7	1,542	29.8	128	32.6
2000	203	30.0	1,584	30.0	150	25.8
2001	199	29.4	1,539	29.2	179	27.2
2002	202	28.9	1,064	23.5	275	22.2
2003	150	27.1	1,130	26.6	300	23.7
2004	218	31.8	1,640	31.0	300	20.5
2005	246	33.4	2,063	36.0	282	17.6
2006	335	38.4	2,815	41.2	302	15.4
2007	433	43.3	3,761	47.1	333	14.4
2008	449	43.6	4,009	47.6	387	16.2
2009	491	45.0	4,438	47.9	580	20.0
2010	576	44.9	5,376	49.1	919	25.6

注1) 『黒竜江墾区統計年鑑』各年次により作成。

2) 「割合」は三江平原の国有農場に占める建三江分局の割合である。

原糧販売と精米加工販売の関係をみると、2005年段階では精米販売が28万トン、加工原糧で42万トンであるから、原糧販売はおよそ164万トン（ここから種子用を控除する）となる。これは、シンガポールとアメリカの合弁会社である益海嘉里（朴〔8〕を参照。2005年に建三江に集荷場を設置）、鶴崗市の米業、優良米産地である五常市の米業に主に販売されていたという^{注9)}。2010年には、精米加工原糧が140万トンであり、残り400万トンが原糧販売されたが、これは益海嘉里に30万トン、鶴崗市の米業に50万トン、優良米産地である五常市と牡丹江市讷水地区に30万トン、省内の米業の庭先集荷に100万トン、省外の米業への売り込み販売に130万トン（うち遼寧省に30万トン）、その他が30万トンであるという。粳生産とその販売形態は、先に見た国有農場全体の動向を体現しているといえる。つまり、水稻生産は拡大しているが、精米より原糧販売の比率が高いのである。

建三江分局管内における北大荒米業の直営精米場は、表6に示すように7精米場である。この内最大のものは建三江精米場であり、2005年に1億元を投資して建設した年間30万トンの粳加工能力をもつ巨大な精米場である。建三江糧庫（北大荒農業の所有で、面積は79万㎡）から10万㎡を借地し、建物と機械設備を新築・新規購入している。加工ラインは4ラインであり、精米機が

16台（全て日本のサタケ製、2005年購入）、色彩選別機が8台（スイス製、2005年と2009年にそれぞれ4台ずつ購入）、脱穀機が8台（2005年購入）である。集荷は、立地する七星農場（建三江分局の所在地）が80%、管内国有農場が20%である。

それ以外の精米場は、北大荒米業設立以前から各国国有農場が所有していたものである。八五九農場と前進農場は、北大荒米業の10大拠点施設に位置づけられ、2010年に増築して加工能力30万トン（4ライン）となっている。その他4精米場は従来の精米能力5トン規模を維持している。したがって、建三江分局内の北大荒米業の精米加工能力は110万トン（精米ベースで73万トン）であるが、実際に精米加工されたのは2010年で10.9万トン（精米7.4万トン）、2011年が8.7万トン（同6万トン）に過ぎない。個別の精米場をみても、最も多いのが建三江精米場の精米ベース3.1万トン、続いて八五九精米場の1.6万トンであり、その他は1万トン未満となっている。集荷量自体は2010年が35万トン、2011年が24.4万トンであり、原糧販売が大幅に上回っていることがわかる（2010年は68.9%、2011年は64.3%）。結局、北大荒米業のシェアは分局管内の粳生産量に対し6.5%、精米生産で1.4%という水準でしかないのである。

表6 建三江分局管内の北大荒米業の直営精米場（2010年）

精米場	設立 年次	年間加工量 (万トン)	貯蔵能力 (万トン)	機械追加 投資年	生産 ライン	初購入量		精米生産量	
						実数(トン)	割合	実数(トン)	割合
1 建三江	2005	30	8	2009	4	129,674	2.4	30,730	0.6
2 八五九	2001	30	6	2010	4	23,668	0.4	15,505	0.3
3 青龍山	2001	5	4	2006～08	1	88,215	1.6	8,814	0.2
4 創業	2001	5	14	2006～08	1	42,871	0.8	8,814	0.2
5 前進	2001	30	12	2010	4	51,761	1.0	5,617	0.1
6 大興	2001	5	3	2006～08	1	13,861	0.3	4,661	0.1
7 勝利	2001	5	6	2006～08	1	—	—	—	—
直営精米所小計						350,050	6.5	74,141	1.4
分局合計						5,376,727	100.0	919,000	17.1

注) 建三江分局での聞き取り、北大荒米業資料により作成。

V 建三江分局における直営米業と民営米業の展開

以下では、北大荒米業に統合されなかった分局・国有農場直営の精米場と民営米業の動向をみてみよう。

直営米業についてはその全体像は把握できないが、以下では分局所在地である七星農場の2つの精米場の実態を示してみる。

まず、建三江米業は1997年に建三江分局での稲作生産が拡大を始めた時期に、分局が建三江米のブランドづくりのために設立した企業（株式会社）である。精米販売のみを行っており、2010年の粳集荷量は1万トン（精米6,800トン）、2011年は2万トン（同14,000トン）であり、変動は大きい。集荷圏は七星農場を中心とした国有農場である。販売先は、軍関係とハルビンのスーパーマーケットへの直接販売を除くと、登録された販売代理人を通じた販売であり、北京、山東、河北、河南などの華北都市部を対象としている。

勝利糧油食品は、七星農場の倒産した麵粉工場を勝利農場が2005年に買収し、2007年から精米事業を兼営するようになったものである。精米場は1ラインで、加工能力は粳ベースで年間2万トン（8ヶ月稼働）である。精米用の倉庫が7棟あり、収容量は2,800トンである。粳の集荷は建三江分局内の国有農場の割合は5%にすぎず、95%が一般農村となっている（2011年）。集荷量の年次変動は大きい。2007年から2011年の5ヵ年平均では14,400トン、原糧販売が4,600トン、加工原糧が9,800トン（精米ベースで6,600トン）となっている。2009年と2010年の精米加工量は大きく、9,000トン、10,000トンとなっている。2011年には輸送用の貨物車の確保ができず、5,000トンとなっている。販売先は、北京、西安、商丘、鄭州、成都、昌州等の卸売商であり、1都市1商人に固定されている。粳販売は地元の糧庫を主体に、4月以降に販売している。

以上のように、分局・国有農場直営の精米場は、集荷範囲も農場に限定されておらず、集荷された粳のうち精米加工比率が北大荒米業よりも高く、より民営米業的な性格が強いといえる。

続いて民営米業の分析に移る。2004年に民営米業の増加に対応し、分局管内の民営米業を管理・監督し、意思疎通を図るために建三江分局米業協会が設立されている。協会によると、2004年発足当時の民営米業の数は20社余りであり、2005年から2008年にかけて急速に増加をみせ、2011年には147社に及んでいる。しかし、以降は減少傾向にあり、2012年12月時点では114社となっている。民営米業のうち、精米加工を行っているのは20社余りであり、それ以外の集荷商、特に零細なそれは急速に淘汰されつつある^{注10)}。

表7は精米加工を行っている米業のうち、上位10社の属性を示したものである。先の建三江米業と同様に、建三江分局での稲作生産が拡大を始めた1997年に設立されたものが6社と多く、2004年から2009年にかけて設立されたものが4社となっている。前者の規模は、1～4トン規模が多く、生産ラインは1ラインとなっており、この時期に設置された省レベルの経済開発区で創業している。これに対し、後者は2.6～6トン規模であり、生産ライン数も3ラインが多く、前者に比較して大きいことが特徴である。経営者は分局・糧庫職員を出自とする者が4社（No.3、4、8、9）、外来者（内モンゴル、安徽省）が2社（No.1、4）、農場内の職工農家出身者が4社（No.5、6、7、10）となっているが、一定の資金力をもって米業に参入していることが特徴である。

事業的には、原糧販売を行わず、全て精米加工しての販売となっていることが、「官営」企業との大きな相違である。また、No.1とNo.4は都市部

表7 建三江分局管内の主要民営米業 (2011年)

会社名	設立 年次	立地	加工量 (万トン)	貯蔵能力 (万トン)	生産ラ イン	備 考
1 万順米業	1997	経済開発区	3.0	5.0	1	経営主は夫婦2人。内蒙古フルンボイル市でのレストラン経営時に建三江米を使用。その後、米販売業に従事のため建三江に転入。建三江煙酒果品公司の倉庫を賃貸して精米業を開始。1997年に開発区に移転し、万順米業として再スタート。現在、妻は精米所の経営、夫は広西で2ヶ所に米の卸売店を経営。
2 鑫盛源米業	1997	経済開発区	2.0	2.0	1	建三江管理局発電所の元職員。解雇後に娯楽施設を経営し、その蓄積で精米所を経営。
3 常青米業	1997	経済開発区	1.6	2.0	1	5人による株式会社。全て現職の管理局の職員。最大株主は七星農場交通科科長。工場長には建三江管理局発電所から解雇された職員を雇用。
4 恒盛米業	1997	経済開発区	4.0	2.0	1	経営主は安徽省出身。最初は粳の集荷商として年間数十万トンを販売。1997年に開発区に精米所を建設し、精米加工を行うと同時に広西に米の専門店を開業し、年間10万トンの米を販売。
5 正大米業	1997	経済開発区	1.0	2.0	1	最初は勤得利農場で不動産を経営、1997年から米業を兼営、2011年には貯蔵不良により250万円の損失を出す。
6 裕豊米業	1997	経済開発区	2.6	2.0	1	七星農場第2生産隊の親戚同士の3名による経営。3名の稲作経営地合計667haを生産基地とし、粳加工を行っている。
7 双盛米業	2004	創業農場	6.0	8.0	2	稲作の招聘農家として創業農場に転入。水稻栽培と井戸掘削を行い、その蓄積で2004年に精米所を建設、2008年に規模拡大。中糧公司、四川省、華南地域を中心に販売。
8 富坤米業	2006	創業農場	3.0	5.0	1	創業農場内にある国家備蓄糧庫を解雇された元職員。
9 宝豊米業	2006	創業農場	4.0	5.0	2	創業農場内にある国家備蓄糧庫を解雇された元職員。
10 益華米業	2009	七星農場	6.0	5.0	2	勤得利農場第2生産隊の稲作農家。2009年に精米業の経営を開始し、交通が便利な七星農場に転入して精米所を新築。

注) 建三江管理局米業協会での聞き取りによる。

に直営の米販売店を有しており、全体として販売への意欲を伺わせる。

VI おわりに

以上のように、建三江という地域レベルにおいても、精米加工・販売が増加しているとはいえ、原糧販売が未だ主流となっている。精米加工の主力は民営米業であり、分局・国有農場直営の精米場がそれに続き、北大荒米業の各精米場は大きな施設投資にも関わらず、精米加工率は低位にとどまっていることが明らかとなった。

国有農場系統の米の集荷・加工・販売会社である北大荒米業グループはその取扱量107万トンからみても中国を代表する米業であることは間違いない。しかしながら、黒竜江省の稲作が単独で日本・韓国・台湾の合計に匹敵する粗生産量1,843万トンをもつ巨大ジャポニカ米産地に成長する中で、同グループの集荷シェアは5.8%にとどまっている。急速に拡大した産地化に対し、加工

施設の投資が追いつかない状況が続いたが、現在においては建三江地区のみでも精米能力が110万トンに達するなど一定の水準になっている。しかし、集荷率が低い状況が依然として続いており、しかも精米施設の稼働率は非常に低い水準にある。事実、建三江分局における粳集荷量自体も35万トンに過ぎないが（全体の6.5%）、さらに精米加工にまわった割合はその32.6%に過ぎない。粳価格が高く、精米価格が比較的到低いという「稻高米低」現象もその一因ではあるが、基本的には精米販売が順調に行われていないという現実がある^(註11)。この結果、原糧のままでの移出が多数を占めており、精米販売については国有農場近傍の民営米業の役割が大きくなっているのである。建三江の事例においても多様な出自の米業が力をつけており、分局・国有農場直営の精米場においても精米販売を中心とした販売体制が確立しつつある。

北大荒米業は国有農場グループの基幹企業であ

り、その経営の状況が職工農家の地代水準を規定する関係にある。その意味では、この米業がマーケティング能力を高め、販売収益を確保することが国有農場全体の発展のための鍵となっているのである。

注

- 1) 日本については農水省『作物統計』、韓国については農林水産食品部『農林水産食品統計年報』、台湾については2期分の合計値であり、農業委員会『農業統計年報』による。なお、粳への換算は玄米を71%、精米を65%として計算した。
- 2) 国有農場における水田開発に関しては朴ほか[1]、朴ほか[7]、加古[11]を、稲作経営の実態に関しては朴ほか[5]、朴ほか[6]を、国有農場の企業改革については朴[2]を参照のこと。
- 3) 全国の精米加工の動向については、朴ほか[8]で分析を行っているが、新規に入手したデータにより改訂した。
- 4) 「分局」とは、「管理局」ともいうが、黒竜江省国有農場総局の傘下農場を管理するための機関である。
- 5) 以上の数字は国家糧食局[3]による。
- 6) 朴[8] pp.83~84を参照。
- 7) 補足調査によると、朴[8] p.85の表4には誤りがあり、2010年の数値により訂正した。
- 8) 朴[8] p.84の図1を参照。
- 9) 建三江分局米業協会の聞き取りによる。以下、同。
- 10) 同上。
- 11) 朴[8] p.90を参照。

参考文献

- [1] 朴紅・坂下明彦・由田宏一・笄志剛「中国三

江平原における国有農場の水田開発と稲作経営—新華農場の事例分析」『農経論叢』57集, 2001, pp.85-98.

- [2] 朴紅「中国国有農場における企業改革の進展と農場機能の変化—二九一農場を事例として—」『農経論叢』62集, 2006, pp.1-14.
- [3] 国家糧食局『中国糧食年鑑』2006~2010年, 经济管理出版社
- [4] 吳志華他『中国糧食物流研究』中国農業出版社, 2007
- [5] 朴紅・張錦女・笄志剛・坂下明彦「中国三江平原における稲作経営の展開と機械化—新華農場第17生産隊の事例(その1)—」『農経論叢』64集, 2009, pp.1-12.
- [6] 朴紅・張錦女・笄志剛・坂下明彦「中国三江平原における稲作経営の労働過程と農家経済—新華農場第17生産隊の事例(その2)—」『農経論叢』64集, 2009, pp.13-23.
- [7] 朴紅・張錦女・坂下明彦「中国三江平原における水田開発の特質—国有農場の展開に着目して—」『農経論叢』65集, 2010, p.83-100.
- [8] 朴紅「中国国有農場におけるジャポニカ米の生産・加工・販売体制—北大荒米業を対象として—」『農経論叢』66集, 2011, pp.81-91.
- [9] 池上彰英『中国の食糧流通システム』御茶の水書房, 2012
- [10] 青柳育編著『中国コメ産業の構造と変化—ジャポニカ米市場の拡大』昭和堂, 2012
- [11] 加古敏之「黒龍江省農墾区における稲作の発展」『2012年度日本農業経済学会論文集』2012, pp.325-332.
- [12] 朴紅・坂下明彦「大規模稲作地帯の形成と精米業展開の特質—中国黒龍江省八五四農場を対象に—」『農経論叢』第68集, 2013, pp.111-120.

(2014年10月28日受理)